

常照

佛教大学附属図書館報

2013

NO. 60



佛教大学附属図書館



ご挨拶

佛教大学長

山極 伸之

昨年2012年、佛教大学は開学100周年という大きな節目の年を無事に迎えることができました。そして、今年は次なる100年に向けて、大学の将来構想に基つきながら、101年目の新たな歩みを開始したところであります。

大学の図書館は、昭和9年（1934年）に鹿ヶ谷から紫野の地に校舎が移転され、新学舎が建設された際に、成徳常照館として誕生しました。以来、新制の大学として新たなスタートを切った折にも、あるいは大学組織を拡大し総合大学として発展を遂げる過程においても、図書館はそれぞれの時代のニーズに応えながら、学術情報を提供し続けることで歴史を積み重ねてきました。

あらためて言うまでもなく、大学図書館は高等教育機関にとって欠くことのできない、極めて重要な学術情報基盤であります。大学の教育活動と研究活動に密接に関わる多様な書籍や文献資料等が



2013 NO. 60

目次

ご挨拶

佛教大学長 山極 伸之

1

『常照』の復刊にあたって

図書館長 谷口 浩司

3

新収資料紹介 新本『授菩薩戒儀』の最古写本

仏教学部仏教学科 准教授 齊藤 隆信

4

『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』を編纂して

図書館専門員 古川 千佳

7

Interview 語学教材と図書館の活用について

文学部英米学科 教授 瀬戸 賢一

12

図書館でレポートを書く

歴史学部歴史学科 特任教授 井上 浩一

16

進化する図書館ウェブサービス

図書館専門員 飯野 勝則

20

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2010～2013年度前半期

24

佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記

28

佛教大学附属図書館の沿革と名前の由来

29

収められ、それらが学生や教職員さらには地域の方々に様々な活用に活用され、より、本学固有の教育研究機能ならびに社会貢献の機能が、図書館の活動を通じて果たされてきたと言えるでしょう。

現在の成徳常照館は、平成9年（1997年）に完成し、ハード的な側面における本学図書館の変革を象徴するものですが、他方、ソフト的な側面で図書館に求められる機能も、時代の変遷とともに劇的に変化してきています。そのような状況の中で、図書館ポータルサイトの開設や、OPAC等に代表されるICTを活用した情報提供も積極的に進めています。一方で、図書館に所蔵されている資料の状況を詳しく紹介することや、図書館の現状等を利用者に伝えることも、情報発信として図書館が行わなければならない大切な取り組みであります。

本学ではそのような役割を担う冊子として、多年にわたり『常照』を発行してきました。2010年以降しばらく休刊をしていた『常照』が、101年目のスタートにあわせて再開されることになり、第60

号として長い伝統を継承しながら、新たな一頁が刻まれることを大変嬉しく思います。

めまぐるしく社会状況が変化する中にあつて、情報発信の手段は今後も変わり続けるものと思われませんが、折々の記録をまとめ、それを形あるものとして残し、次代に継承していくことも、私たちがなすべき重要な取り組みの一つと考えます。

本書『常照』が、図書館報として「今」求められている役割を果たすとともに、本学図書館を利用するすべての方々にとって有意義なものとなり、あわせて次なる時代への橋渡しとして活用されますことを心から念願し、『常照』再刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。



図書館長 谷口 浩司

『常照』の復刊にあたって

佛教大学附属図書館の1階フロアに「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」の木額が掲げられています。この木額は、これまで書庫の中で大切に保管されてきましたが、本学図書館の生い立ちと「成徳常照館」と名づけられた理由が詳しく記されていることから、誰もが見られる場所に掲げることになりました。佛教大学100年の歴史は宗門関係者をはじめ多くの有縁の方々のおかげによって築かれてきました。佛教専門学校時代の最初の図書館もまた尊い浄財によつて建設され、「繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられました。大学昇格後の図書館にも受け継がれたその名称には、書物をひもとく者が努力して立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。

現在、佛教大学附属図書館には、2011年3月に開設した二条キャンパス図書室の蔵書を

含め、100万冊近い蔵書が収められています。の中には浄土宗の寺院や元教員、篤志家の皆様から寄贈を受けた書籍をはじめ、古今東西の貴重な古典籍が多数含まれています。その中から2400点余りを選んで、昨年10月、開学100周年記念として『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』を刊行いたしました。

本学の図書館には、各学部・教育・研究領域をはじめとする多様な分野の学術情報とともに、多くの有縁の方々のご支援を受けながら発展してきた佛教大学の歴史が詰まっています。本年は開学101年目の新たなスタートの年。木額にも記された歴史をたえず思い起こしながら、「成徳常照館」の名に込められた願いを未来へと発展的に継承し、智慧の光を、地域へ、世界へ、さらに明るく広く輝かせていかななくてはなりません。『常照』という歴史あるタイトルでの図書館報の復刊にあたり、そのことをあらためて強く感じています。



新収資料紹介

仏教学部仏教学科 准教授

齊藤 隆信

新本

『授菩薩戒儀』の最古写本

はじめに

浄土宗の僧侶になるための最後の関門を伝宗伝戒道場（加行道場）と言います。文字どおり宗脈と戒脈を伝承する道場ということで、毎年12月に知恩院と増上寺において開筵されております。場所や期間など歴史的な変遷はありますが、宗祖法然上人から代々伝承され今日に至っているということは、浄土宗独自の僧侶養成が800年間にわたって受け継がれてきたことを意味します。脈とは血脈や譜脈ということですから、師匠から弟子へと法が伝承されていくことを、親子の血のつながりや一族の系譜にたとえてこのように表現するのです。具体的に言うならば、伝宗とは宗脈である称名念仏を伝承すること、伝戒とは戒脈である円頓戒を伝承することになります。

『授菩薩戒儀』

ここで紹介する『授菩薩戒儀』は伝戒にかかわる資料です。伝宗伝戒道場に入り2週間がたちますと戒脈正伝法（正授戒）という儀式を行います。これこそが円頓戒を伝承する儀式なのです。つまり浄土宗門人になるからには、臨終にいたるまで止悪行善を心がけ利他行を実践すること（これを円頓戒と言います）を誓う儀式です。儀式である以上は定

められた順序や作法にもとづいて行われます。それを記録した台本こそが『授菩薩戒儀』なのです。歴史的には中国天台宗の湛然（711～782）が著わし、それを最澄（767～822）が日本にもたらし、以後天台宗においてはこれにもとづいて僧侶養成を行ってまいりました。法然上人も13歳で比叡山に登り、15歳で有髪童形のまま皇円阿闍梨の膝下で仏教を学んでいたおり、後に師僧となる叡空上人からこの円頓戒を相承されて正式な出家僧となられたのです。その後43歳で比叡山を下り浄土宗を開いた後も数多くの弟子に円頓戒を授与されました。その際、天台宗の『授菩薩戒儀』を浄土宗にふさわしいような台本に改訂したのです。それが現在の浄土宗で用いられている『授菩薩戒儀』ということになります。

2種の『授菩薩戒儀』（古本と新本）

法然上人が改訂した『授菩薩戒儀』、実はこれに2種あります。一つは古本戒儀、もう一つは新本戒儀と呼んでおりますが、内容において大差はありません。その新本戒儀については、法然上人が京都嵯峨の二尊院において改訂し、それを弟子の湛空に相伝したという伝承があります。長い間二尊院の宝庫に珍藏されていた秘書だったところ、知恩院宮門跡

第3代の尊統法親王（1696～1711）の教導役となっていた梁道和尚（？～1731）が約500年ぶりに世に公にされました。それ以前は古本戒儀を用いて伝戒儀式を行っていたのですが、発見以後は江戸の檀林でもこれが用いられるようになったと言われています。その後もまた変遷を経て、現在増上寺では古本戒儀を、そして知恩院では新本戒儀を用いております。

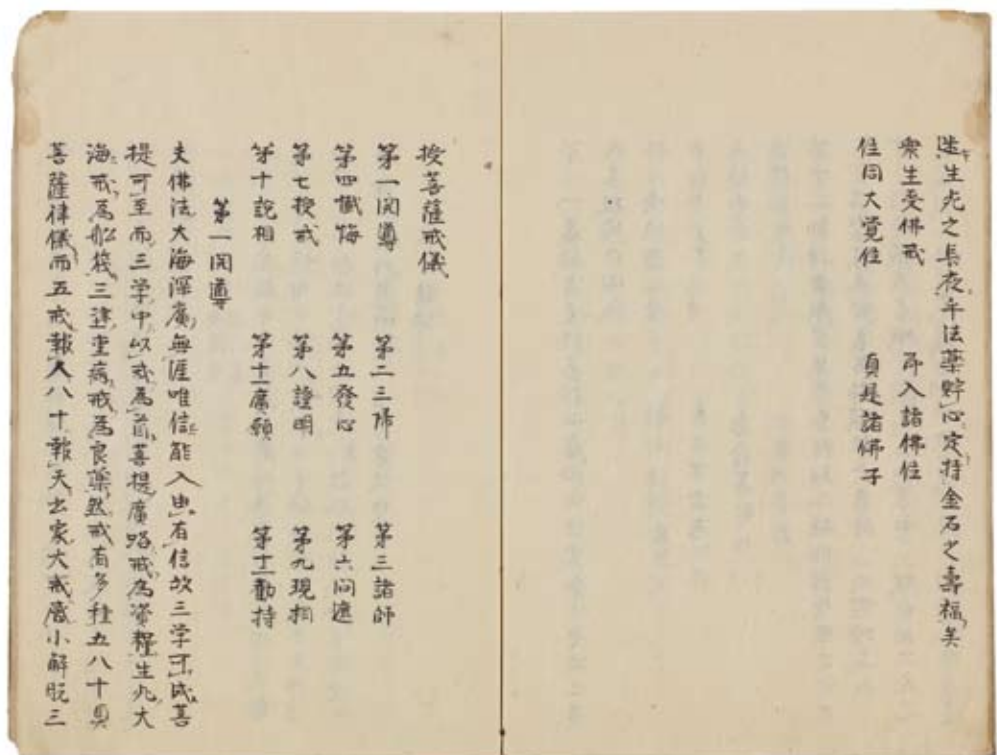
佛敎大学所蔵本について

佛敎大学図書館所蔵本は、『授菩薩戒儀則』（古本戒儀）、『授菩薩戒儀』（新本戒儀）、『円頓菩薩戒布薩式』（布薩式）の3部が合冊されています。ここでは新本戒儀（以下本書とする）に限定して紹介したいと思います。と言いますのは、実は新本戒儀には古い写本も版本もなく、したがって本書が最古のテキストになるからです。かつて百万遍知恩寺第69世の林彦明大僧正（1868～1945）は、梁道和尚が発見した二尊院所蔵の原本を見しようとしたのですが、すでに散逸していたのでしょうか、確認することができなかったそうです。そこで自らが道場長を務めていた総本山専修道場に所蔵されていた宅亮書写の明和5年本（1768）を底本とし、その他4種の写本を校訂本として、昭和14年

に『昭和新訂 授菩薩戒儀』を発刊いたしました。ところが昭和20年7月の沼津空襲によつて林大僧正が住持していた寺院は灰燼に歸し、そのわずか2か月後には本人も逝去されてしまい、京都の専修道場にしても林大僧正という推進力を失い、また戦後の混乱もあつて閉鎖を余儀なくされたのです。こうして専修道場所蔵の新本戒儀の写本類は、今なお行方がわからないままとなっています。したがって、現在新本戒儀を用いている道場や機関における伝戒儀式、たとえば知恩院の伝宗伝戒道場や佛敎大学の授戒会、そしてまた佛敎大学における円頓戒の講義は、この昭和14年に刊行された『昭和新訂 授菩薩戒儀』や、それにもとづいて平成10年に発刊された『浄土宗聖典』巻5所収本といった新しい資料に頼っているというのが現状です。

ここではすべてを紹介できないので、せめて本書の奥書だけでも確認しておきましょう。

謂第一之者、古本戒儀也。円頓許可之中云黒谷古本戒儀者、則是也。次一本者、新戒儀也。則二尊院湛空上人之所傳也。後一本者、布薩式也。是亦湛空上人所傳也。則此一本者、台浄兩宗通用之式目也矣。此三本共享保七夏、梁道・玄



授菩薩戒儀

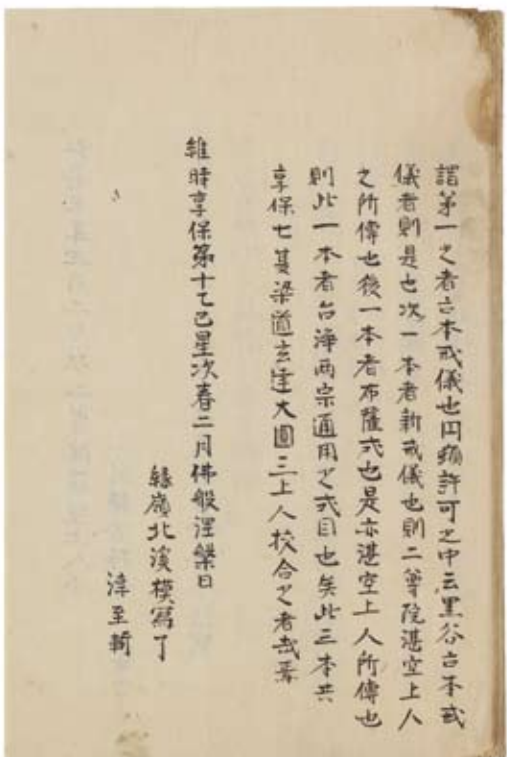
達・大圓三上人校合之者哉焉。
維時享保第十乙巳星次春二月佛般涅槃日 緣嶺北溪模寫了 淳至軒

梁道和尚が二尊院所蔵の新本戒儀を
発見し公表した年時については不明です
が、尊統法親王の門跡在任中（1707
～1711）であることは確実であり、そ
うすると本書の書写年である享保10
（1725）年は発見されて20年を経て
おらず、その発見者である梁道和尚の存
命中ということでもあり、しかも林大僧
正が校訂本の底本とされた宅亮書写本
よりも43年も古い写本ということにな
ります。まず何よりも現存最古の写本
ということこそ本書の価値があると
言わなければなりません。

また、この奥書には新たな情報も含
まれております。本書を発見した梁道
が享保7（1722）年の夏に玄達と大
圓とともに、これら古本戒儀、新本戒
儀、布薩式を校訂していたということ
です。その玄達とは感蓮社洞誉上人、江戸
の檀林をいくつも歴任した学僧で、大圓
とは紅蓮社敬阿央誉上人、やはり檀林
勝願寺の第26世に晋董されております。
当時はそれぞれの檀林で僧侶養成を
行っていましたから、おそらくは統一テ
キストの作成を企図してこれら3人の

学僧が参集し校讎されたのではないかと
考えられます。

奥書の最後にある「淳至軒」とは本書
が写された増上寺の北溪（北谷）にあっ
た学寮であろうと思われます。享保年
間の増上寺といえば学寮の最盛期で、15
歳以上の年若い3000人もの僧侶が
150棟の学寮に掛錫して行と学に励
んでいました。本書を書写した人物につ
いて特定することはできませんが、能筆
ではないものの最後まで乱れることな
い筆跡から推して、僧侶となるべく淳至
軒に寄宿していた真摯な一学徒であった
のでしょう。



おわりに

古写本の多い日本にあつて享保年間
の写本など珍しいものではありません
が、本書は数少ない新本戒儀の中でも最
古の写本という点で稀覯書であります。
おそらくは、今後これを遡る新本戒儀
が世に出る可能性は限りなくゼロに近
いでしょう。なお、現行の林大僧正の校
訂本と比較してみますと、撰心書写本
（1773年）と同系でありながらも、他
の写本に見られない独自の用字もあり
ました。それを含む本書の影印と解説に
ついては、『仏教学部論集』第98号（平成
26年3月）に掲載する予定です。



齊藤 隆信 仏教学部仏教学科 准教授

1966年新潟県生まれ。1995年佛教大学文学研究科博士後期課程満期退学、博士（文学）。専門分野は浄土教思想、中国仏教。著書論文に『新アジア仏教史』（佼成出版社、2010年、共著）、「浄土宗学としての戒とその意義」（『日本仏学会年報』74号、2009年）、「法然の戒と念仏」（『法然上人研究論文集』、2011年）などがある。

『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』を編纂して

図書館専門員

古川 千佳



はじめに

2012年秋、本学は開学100周年を迎えた。
学内各部署で様々な記念イベントが計画されるな
か、附属図書館においても記念企画として貴重古
典籍目録の刊行計画が掲げられ、筆者が編纂を命
じられたのは2010年半ばのことであった。通常
の冊子目録編纂とは整理済資料群の目録データを
もとに書式を考慮し体裁を整えながら編集してい
くものなのであるが、今回はデータがまったくな
い状態、しかも物理的整理からスタートしなければ
ならないのである。どれだけの量となるのかさえ不
明のまま一点点を確かめながらの作業。きわめて
不確定状態での開始であり、ただひとつ確定してい

るのはゴールの日限だけであった。整理も含めた編
纂期間は2年足らず、一刻の猶予もない。書庫に
眠っていた図書達を揺り起こし、1年半ほどをか
けて、ようやく基本となるデータの入力とともに
保存対策・計画も兼ねた物理的整理を行なったの
であるが、冊子目録の編纂はそこからがほんとう
のスタートとなるのである。入力したデータの抽
出、収録するものとしての取捨選択、記述内容量、
書式体裁などの考慮等、すべてを同時進行させな
ければ間に合わず、最後の原稿に責了のサインを
行なったときがすなわち収録資料の全貌を知ると
きであった、という綱渡りの事業であった。オンラ
インのデータベース目録と異なり、冊子目録は一度
刊行したら固定してしまうため校正にはいくら念

を入れても足りないくらいであるのだが、推敲の時
間さえなく心残りは尽きない。また、ひとことで貴
重書といっても、普通書古典籍をも把握してはじ
めて貴重書の価値がわかるのであり、普通書の存
在およびその十分な調査があつてこそその貴重書な
のである。本学においては普通書古典籍の整理が
まだ道半ばの状況にあり、この意味ではまだ貴重
書整理もほんとうに完了したとはいえない。

本目録の収録範囲

古典籍とは何か。「典」は「丁（机）」の上に「冊（書
冊）」が載っている形を表し、大切な書物という意
味である。「籍」は「竹」と「藉」で構成され、土を未

(すき)で薄く起こして重ねるように、竹片を重ねて簿冊、簿書とすることを意味している。「典」も「籍」も書物を表す文字であり、それに「古」がついた古典籍とは古い大切な書物ということになる。貴重書、古典籍に万国共通、一律の基準があるわけではないが、古典籍とはおおむね近世以前に書写または印刷された図書をさすことが一般的である。「佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録」と名付けた本目録には本学に所蔵している図書の中から貴重かつ古典籍という二つの条件にあてはまるものを抽出し収録したということになる。つまり、どんなに高名著名人の書写本や手沢本であるうが、どんなに高額な図書であるうが、昭和や平成に刊行された図書は含まれていない。

本学古典籍の特徴

貴重書、準貴重書についてひとまずの整理を終えたところで、本学所蔵古典籍の中から、書誌的特徴を示すものをいくつか紹介しておきたい。

佛教大学附属図書館貴重書第1号となった図書『**選擇本願念佛集**』(鎌倉時代)

通称「選擇集」とよばれることも多いが、正式書名

は『選擇本願念佛集』。法然上人(1133—1212)が建久9年(1198)に撰述したもので、浄土宗の根本宗典となっている。本学所蔵刊本には年記がないため確かな出版年はわからないが、建長3年(1251)版他本と同文の刊語をもつことから、同年よりあまりくだらないものと思われる。もとも古いものは京都廬山寺に蔵されている鎌倉初期の草稿写本であり、刊本では延応元年(1239)版がもとも古く、本学所蔵本似寄りの建長3年版は刊本では2番目に古いもの。

佛教大学附属図書館所蔵本中もとも古い時代に制作された資料

『**無垢浄光經相輪陀羅尼**』および**小塔**(奈良時代)

通称「百万塔陀羅尼」とよばれている。神護景雲4年(770)の制作であることがわかっており、出版年の判明する印刷物としては世界最古である。称徳天皇(718—770)の発願により作られた4種の陀羅尼根本、相輪、自心印、六度)のうちの一種である。合計100万枚の陀羅尼が100万基の木製小塔に納められ、南都十大寺に10万基ずつ分奉された。現在では法隆寺のみに、ある程度のみとまりをもつて伝存している。おもに明治以降、寺外に出されたものが多く、本学に所蔵する1本もそのうち

のひとつである。陀羅尼經文の印刷方法については銅版説、木版説、いまだ判明していない。

佛教大学附属図書館所蔵本中もとも古い時代に製作された朝鮮本漢籍

『**漢書**』(李氏朝鮮世宗時代)

宣徳6年(1431)、卞季良による跋文「鑄字之設可印群書以傳永世誠爲無窮之利矣／＼(中略)／＼宣徳三年閏四月日崇政大夫判右軍都摠制／府事集賢殿大提學知經筵春秋館事兼成均大／司成世子貳師臣卞季良拜手稽首敬跋／宣徳六年辛亥五月日印」をもつ銅活字本。『漢書』には『前漢書』と『後漢書』があるが、本書は後漢の班固によつて編纂された前漢書。100巻、もと36冊であったが、巻49—52(列傳卷第19—22)、70—85(列傳卷第40—55)を欠き、うち82—85(列傳卷52—55)には鈔本(写本)を補す。

佛教大学附属図書館所蔵本中もとも古い時代に製作された洋書

『**Theatro de la tierra universal**』(16世紀)

“Theatrum Orbis Terrarum”(世界の舞台)の名で知られる世界地図帳のスペイン語版で、ベルギーのアントワープで1588年に出版されたもの。著

作者のアブラハム・オルテリウスOrtelius, Abraham(1527—1598)はフランドル人の地図製作者であった。1560年にメルカトル図法で知られる同郷の知人、地理学者ゲラルドゥス・メルカトルMercator, Gerardus(1512—1594)と旅行をともにしてから、地理学者としての才能も開花させた。メルカトルの学問的影響を受け、地図帳編纂に専心すること10年、1570年に“Theatrum Orbis Terrarum”をアントワープで出版している(フテン語)。世界初の近代的地図ともいわれるこの世界地図帳はその後改訂を重ねながらヨーロッパの多くの言語に翻訳されていく。本学所蔵本もそのひとつで、ヴェラム革装である。この1588年版における日本はアジア図のほんの片隅に描かれるのみで、単独で描かれた日本図が加えられるのはこれより数年後の1595年になってからであった。



“Theatro de la tierra universal” タイトル頁
下部に記されたローマ数字「M.D.LXXXVIII.」は出版年1588を示す



“Theatro de la tierra universal” のアジア図
日本「IAPAN」は右上方に描かれ、京都は「Meaco」(都)と記されている

以上は特徴的な個別の資料を数点とりあげてみたが、次に全体的な特徴について記しておきたい。

本目録に収録された図書の内容分野をみれば一目瞭然、およそ半分が仏教関係の典籍であることがわかる。また普通書と貴重書、準貴重書の量的割合をみると本学貴重書の数はお世辞にも多いとはいえないのであるが、同内容同書名の典籍に複数の所蔵をみるものが比較的多い点も特徴としてあげることができる。近代活字本の複本所蔵と異なり、このことは古典籍においてはプラス要素の特徴といえるものであり、頁を開き、複数の現物を横に並べて版面を比較し、違いを浮かび上がらせることができるということの意味している。すなわち古典籍を通して研究を行なう場合、単一な翻刻本ではわからないこまかな違いを知ること、またWeb情報をはじめとする安易なヴァーチャル世界に流されず、テキスト批判のできる真の目を養わせるからこそ大学教育の基本であるからである。

さてこのほかにも書状や断簡等を含めればもっと古いものも存在する。『佛教大学附属図書館所蔵貴重典籍目録』を紐解いてご覧いただければ思いがけない典籍にめぐり合うことができるはずなので、あとは読者のみなさまがご自分で発見されるようにお楽しみを残しておきたい。

本学図書の蓄積と今後の活用

本学にかぎらず図書館の蔵書は予算を投じて購入するものと寄贈されるものによって成り立っており、これは今日も変わりがない。明治時代に創立した学校や大学の多くは官立私立を問わず、近代的な学問環境を整えるため、学問の核となる図書を早急にかつ大量に収集しなければならなかった。そのため現物図書の寄贈や購入資金の寄付を全国に呼び掛けた大学もあり、たいていの場合大変な努力をしている。

『佛教大学史』(昭和47年)には本学が開学の起点とする佛教専門学校より以前の前身時代、浄土宗専門学院の章に書籍の寄附について「浄土宗専門学院〔寄附台帳〕には、明治三十二年以降、相次ぐ宗門僧侶や篤志家たちの寄贈が記されている。」と書かれている。この台帳は書籍だけの台帳ではなかったためか、図書館には伝わっていない。図書館には明治31年(1898)10月をはじめとする図書の資産台帳である図書原簿が保管されているのみである。この原簿は詳しい書誌情報を目的とした目録ではなく、資産として識別するための最小限のキーワードが記載されているものである。ちなみにこの台帳に登録された最初の図書は『菩薩戒經』で、明治31年

10月に「購入」登録されている。その後は寄贈によって受け入れられた図書の行が続いており、本学も多くの方々の篤い志によって大学の学問環境を整えてきたことがわかる。図書原簿を見ると明治草創期に本学が受入れた図書はその多くが近世までの仏教関係典籍類である。浄土宗僧侶育成に発した本学の沿革、明治時代の直前は江戸時代であったこと、などを考えれば当然のことであるが、それらは佛教大学蔵書の核となったもつとも佛教大学たる蔵書古典籍である。

このたびの『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』だけでなく、本学所蔵資料の目録データは、佛教大学OPACに反映される本学データベースとともにZACSSCAT総合目録データベースにも登録することにより世界中に目録情報の発信を行なっている。ご厚志の賜物である多くの蔵書を本学の学生や研究者だけで独占するのではなく、学問を志す世界中の利用者に広く公開し、学術研究・文化の向上に活用してもらうことが寄贈してくださったかたがたに対する恩返しにもなることと考える。ただ残念ながら本学の古典籍はいまだすべては整理されていない。目録情報データの作成とともに利用に供するための物理的整備・排架も必要となる。一刻も早い整理完了を目指したい。

おわりに

筆者は大学時代まだ学部学生であった頃、古文書学や書誌学、連歌を中心とする中世文学研究で著名な伊地知鐵男教授(宮内庁圖書寮・勤務、のちに早稲田大学教授)に縁あって師事することとなり、古典籍との出会いがはじまった。日常的には東京都内の文庫めぐり、長期の休暇期間になると、帰省や観光を兼ねて日本各地の古典籍を所蔵する文庫や大学図書館をたずねるよう命じられた。京都にもたびたび訪れることとなり、このたびユネスコの世界記憶遺産に登録された『御堂関白記』を擁する陽明文庫にもよく足を運んだものであった。以来、古典籍と顔をあわせる時間が重なる今日に至っている。大学図書館の仕事は大変種類が多く、いずれも古典籍の仕事だけに没頭できるようなところはない。しかし日本が世界でもまれにみる豊かな古典籍に恵まれた国、たび重なる戦火や災害をもくぐりぬけて多くを守り続けてきた国であることに気づかされ、同時にわたくしどもにも次代に継承していく責任が課せられていることをひしひしと感じる毎日である。古典籍・書誌学との出会いからは40年余を経たことになるが、本学図書館での経験はまだ10年余でしかない。そんな浅学の身に百年の蓄積をもつ本学の貴重書が委ねられたことを感謝するのみである。

本学草創期の歴史を感じさせる蔵書印や蔵書票



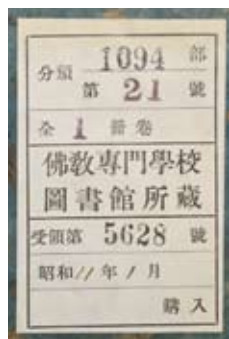
蔵書印「佛教専門學校蔵書印」



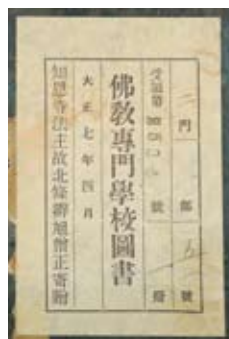
蔵書票「浄土宗大學圖書」



蔵書印「浄土宗専門學院」



蔵書票「佛教専門學校圖書館所蔵」



蔵書票「佛教専門學校圖書」

語学教材と図書館の活用について

図書館4階東側に書架を増設して、語学教材コーナーを新しく設置しました。OXFORD・MACMILLAN・SCHOLASTIC・PENGUINなどの洋書シリーズのリーディング教材をはじめ、TOEICやTOEFLなどのテスト対策の学習教材などを配架し、貸出もできるようにしました。

語学教材に関して日頃からさまざまなアドバイスをいただいている英米学科教授の瀬戸賢一先生に、語学学習に関連するご専門の話や語学教材の活用について、図書館がお話をうかがいました。

——「新しい英和辞典の編集」が先生の研究課題の一つになっていますが、これまでどのような辞典を編集されてこられたのかご紹介ください。

私が編集主幹として携わったものとしては、『英語多義ネットワーク辞典（小学館）』と『プログレッシブ英和辞典（小学館）』の2冊があります。2007年に刊行した『英語多義ネットワーク辞典』は、世界でも初の

一方、『プログレッシブ英和辞典』については、1980年に刊行した初版の執筆に携わりましたが、2012年刊行の第5版では編集主幹を務めました。こちらは上級の英和辞典として13万8000項目を収録し、高校生から一般社会人まで幅広いユーザーの要望に応える編集を行っています。第5版では、意味の全体像を丸ごと提示する最新の語義記述方式を採用入れました。一般向けの辞典に多義語辞典の方法を取り入れた点が類書には見られない大きな特徴の一つになっています。

——いまは電子辞書もある時代。紙の辞書を持つていないという学生もいるのではないのでしょうか？

電子辞書の場合、小さな画面の最初に表示されたページだけしかみないという傾向が往々にしてあります。多義語の場合はスクロールをしなくてはなりませんが、用例ごとに別のページに移らなくてはならないため、面倒になって最初に表示された訳語だけしか見ないということになってしまうのです。紙の辞典だとパツと開けたら全体がわかる。目に入ってくる情報量が多く、関連情報や周辺情報に目が行く可能性があり、そこから一語の全体像をつかむこともできますので、英米学科の私の授業では紙の辞典を引く訓練もさせています。

英語の多義語辞典です。一つひとつの単語にはたくさん意味があり、それらは密接に関連しあっていますので、一般的な辞典のように語の意味を頻度順に並べる

ようなことはせず、意味のつながりを体系的に記述することに主眼を置いて編集を行っているのが特徴です。単語も私たちの体と同じように手足や胴体があつて、一つひとつの部位だけを眺めていては全身が見えません。頻度順というのは各部位をバラバラに切り刻んでいるのと同じで、それでは各部位がどのようなつながり、全身を構成しているのかがわかりません。『英語多義ネットワーク辞典』

では、英語の最重要多義語1427語を選んで、語義のつながりを解明し、各語の意味の全体がくつきりとわかるようにしました。英語の教員や研究者、大学院生、英語を日常業務として扱う実務家などを主な読者対象としています。

いまの時代、電子辞書はおろか下手をするとスマホですべて済ましてしまうこともできますが、語学はあまり楽をしてはだめですね。辞典にもいろいろな種類がありますが、書いてあることが辞典によって随分違います。頻度順と言いつつ、訳語の順番が辞典ごとに全然違ったりしますから、複数の辞典を自分で実際に引き比べて確かめることが重要です。

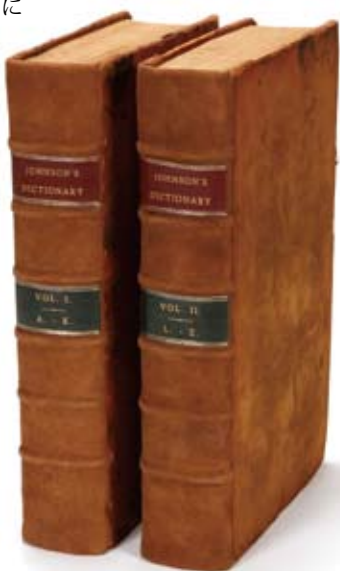
とはいえ、紙の辞典は重く、何冊も持ち歩くことはできないので、携帯用は1冊にして、あとは図書館を活用することです。佛教大学の図書館の書庫には18世紀にサミュエル・ジョンソンによって編纂された大英語辞典のような貴重書まで保管されています。ジョンソンの英語辞典

といえば世界の辞典編集の出発点にもなったような非常に貴重な辞典です。私はロンドン市内にいまも残るジョンソンの辞典編纂の現場となった場所にも行ってきましたが、こうした歴史的にも学術的にも非常に重要な辞典まで佛教大学の図書館には保管されているのです。図書館はまさに知の宝庫です。辞典や辞書のコーナーにも一般的なものから非常に専門的なものまでいろいろ揃っていますから、もっともつと活用してもらいたいですね。

文学部英米学科 教授

瀬戸 賢一

1982年、大阪市立大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。
文学博士。
専門は英語学、レトリック。



——ところで、先生はレトリックの専門家でもいらっしゃるようですが、レトリックについて学ぶことは、語学学習にどのように役立つのでしょうか？

これからの時代、いろいろな国々の人々と交流する機会がさらに増えていくことでしょう。グローバル化が進む中で、私たち日本人も、世界に通用する書き方や話し方の技術を高めていく必要があります。使う言葉が日本語であれ英語であれ、世界中の誰が読んでも、誰が聞いても、わかるような書き方や話し方をしていかなければなりません。日本では「読んでわからないのは、読み方が悪い、行間が読めないからだ」と言われたりもしますが、読み手や聞き手のせいにするのではなく、発言内容や文章内容には話し手や書き手が責任を持ち、テーマや結論がはっきりと相手に伝わるような構成と表現がこれからです。求められるようになることでしょう。

私は英語学を専門としています。英語を対象に言葉の仕組みや構造を探っています。が、英語学を学ぶには、母語の日本語にも目を向けて、言葉による表現のおもしろさにまず気づくことが大切であると考えています。そうした観点から日本語のレトリックの研究も行っているのですが、レトリックとは、簡単に言えば、あるモノを別のモノにたとえて表現したり、人間以外のモノを人間にた

とえて表現したりなど、「言葉の言い回しをひと工夫して魅力的に表現することで、説得力を高める技術体系」のことです。言い方を換えれば、「話し手や書き手が聞き手や読み手の立場に立つて、より納得してもらえる話し方や書き方をするのに必要な工夫のこと」と言ってもいいでしょう。語学において世界に通用する表現力を高めていく上で、レトリックの手法から学ぶことはたくさんあると思います。

レトリックに関してはたくさん本を書きました。『メタファー思考』（講談社、1995年）と『日本語のレトリック』（岩波書店、2002年）の2冊は特にポピュラーでロングセラーになっています。大学の入試問題にもよく取り上げられています。図書館にもレトリックに関する本がいろいろ揃っていますから、ぜひ一度読んでみてほしいですね。

——最後に、図書館が整備を進めている語学教材コーナーの活用についてお聞かせください。

まずリーディング学習用の教材として、語彙や構文の数をレベル別に制限して、ストーリーを楽しみながらたくさんさんの英文にふれられるペンギン・リーダーズのような洋書シリーズの整備を進めてもらっています。こうしたシリーズのものにはCDも付いてい

ますから、自分で楽々読めるようなレベルを探して、それをCDと一緒に聞くようにするといいたいです。英語の苦手な学生にとっては一般的なペーパーバックを読んでもわからない部分が多すぎて学習の継続がむずかしいなってしまいます。



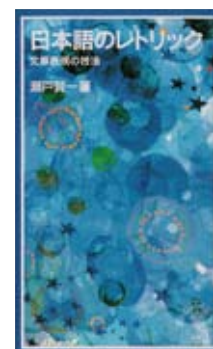
しくなっています。ペンギン・リーダーズをはじめとする洋書シリーズのリーディング教材はレベル別に分かれていますが、ジャンルも幅広く、有名な映画や音楽グループのストーリーなども含

まれている内容的に面白いものが揃っています。気軽に読める薄さなので、多読ができることも特徴です。CDも含めて館外貸出ができるようになりましたから、学生にも好評のようです。

また、英字新聞についても、今年の4月から学習用のタブロイド判英字新聞を増やしてもらいました。英字新聞ですが、ちよつと難しい単語には説明の註が載っていたり、TOEICの問題を掲載していたり、英会話の内容も含まれていて、学生にはぴったりです。英字新聞も、新聞置き場ではなく語学教材の専用スペースの中に配置するなど、もっと活用できるような環境が整備されるといいですね。

TOEIC対策の教材も充実してきました。私のゼミにはTOEICで800点以上を取った学生が何人もいて、さらに900点以上をめざしている学生もいます。留学する学生も増えてきましたから、TOEIC対策の教材も充実させてもらおうと思っています。

語学教材の充実とともに、今後の課題として、図書館内などに学生たちの学びのサポートや指導を専門に行うインストラクターを常駐させることをぜひ検討していただきたいと思います。学生の立場に立って、学生のためになる学習環境の整備を行うことは、大学にとって最も重要なテーマの一つです。図書館と連携して今後もさまざまな提案を行っていくつもりです。



図書館でレポートを書く

歴史学部歴史学科 特任教授 井上 浩一



レポートを書くことになりました

Aさん おはよ。図書館で会うなんて珍しいやん。

B君 西洋史概論のレポートやねん。先生、「レポートは図書館で書け」と言っってはったからとりあえず来たんや。

Aさん テーマは何にするの？ 確か、自分で決めるんやろ。

B君 剣闘士スパルタクスにするつもり。授業で貰った『レポート作成の手引き』に、テーマが決まったら図書館で予備調査、と書いてあるけど、予備調査って何をやるのかな？

Aさん 辞典を使っただいたいのところを調べたり、キーワードや基本文献を見つけてることやんか。そやけど、辞典はどこにあるのやろ？ ちょっと訊いてみるわ。

図書館の人 百科事典は2階、歴史関係の辞典なら3階にあります。少し低い本棚に並んでいて、ラベルの最初にRとあるのが辞典をはじめとした参考図書類です。みんなが使っので貸し出しはしません。

Aさん・B君 行ってみよか。



予備調査から始めます

B君 まずは百科事典から。いろいろあるな。平凡社の『世界大百科事典』が平凡なところから始

めるのが無難かな。

井上 しょうもないこと言ってるんと、さっさとスパルタクスを調べよつに。

B君 あっ、先生。こんなところで？

井上 「こんなところ」はないでしょ。私も授業の資料を調べてます。

Aさん ちょうどよかったやん。先生、予備調査のポイントは何でしょうか？

井上 テーマにあった辞典を選ぶこと、クロス・レファレンスをする事です。西洋史全般なら『西洋史辞典』、ローマ人について調べるなら『古代ローマ人名事典』といった具合です。

B君 クロス・レファレンスって何ですか？

井上 関連項目を次々と見てゆくことです。どんな知識が広がります。わかったことはノートやカードに書き抜きましょつ。

文献調査は難しい？

井上 予備調査が済んだら、その情報をもとに仮アウトラインを作ります。つまりレポートのたいの構成を考えるのです。仮アウトラインができたなら、文献調査です。

Aさん 図書館の本棚を順番に見てゆくのですか？

B君 いまどき、それはないやろ。いくら時間があっても足らへんわ。



井上 いやいや、本棚を見るのも大切ですよ。簡単に調べるならOPACが便利です。テーマずばりの「スパルタクス」はもちろん、予備調査で調べたキーワードを使って検索します。うちの図書館は学生向けの本が充実していますので、よっぽど変なテーマでない限り、必要な文献はほぼ揃います。ただし、OPACの使い方にはコツがあります。

Aさん そのコツを教えてください。

井上 うーん……、習うより慣れるかな？

図書館の人 図書館が実施する利用ガイダンスに参加してもらうと、うまく検索できるようになりますよ。井上先生もよかったですら今度どうぞ。

B君 やってみようか。簡易検索で「スパルタクス」とあれっ、一件だけ。『管弦楽名曲集』？

井上 (笑) ながら空振りでしたね。「ロッセウム」など、別のキーワードで検索してみしよう。辞典のスパルタクスの項目は土井正興さんが書いてましたね。「土井正興」も検索してください。

……そこそこの文献が見つかりました。しかし肝心の土井正興『スパルタクスの蜂起』は、うちの図書館にありません。

図書館の人 Cini Booksなどで所蔵している大学・図書館を調べてください。図書館を通じて借りることができます。

B君 ただで借りられるんですか？

図書館の人 もちろん、送料やコピー代は払ってもらいます。

井上 文献を集めるコツは唯一つです。「金と手間を惜しむな！」

Aさん・B君 (顔を見合わせて) そんな、コツ

井上 参考文献として挙げられている本ですね。少なくとも、図書館にあるか調べて、あったら、どんな本か見ておきましょう。たくさん読めば、その分いいレポートが書けるはずですよ。

いよいよ執筆です

B君 読み終わったので、いよいよ書き始めることにしたわ。提出期限も近いからね。

Aさん もう最終アウトラインは作ったの？

B君 最終アウトラインと「言う」？

Aさん レポートの目次みたいなものやん。書き始める前に、全体の構成を確認して、それに沿ってノートやカードを整理する、と先生が言うてはったやろ。

B君 それやったら作ってある。簡単なメモやけど。

井上 最初から完璧な文章を書くとうとすると、筆が進みません。下書きは大胆に書いてゆきましょう。大切なのはそのあとの推敲です。

B君 書き直すのは面倒くさいので、一発勝負でいきたいのですが。

井上 皆さんには無理です。何十年と原稿を書いてきた私でも、何十回も推敲しないと、人に読んでもらえる文章になりません。完璧な原稿をスラスラ書く大作家もいるようですが、真似しても失敗します。



とは言わへんで(笑)。

本を読んでノートをとりま

B君 集めた文献をこれから読むのやけど、本は図書館で読め、と先生が言うてたね。

Aさん わからないことが辞典で調べられるからでしょ。読んでいる途中で、別の本を参照する時も、すぐ探せるし。

B君 そのわりに図書館、空いてるね。もったいないな。さてと、図書館に取り寄せてもらった『スパルタクスの蜂起』を読もうか。だいぶお金がかかったから、じっくり読まんと。

井上 読書ノートの作り方は授業で話しました。忘れてしまった人は仮想大学エモを見てください(19ページ参照)。

Aさん 先生、レポートには自分の意見や感想も書くのですか？

井上 決まりはありませんが、西洋史概論の場合は、自分の意見も

しっかり書いてください。そのためにノートをとる時にも、本に書いてあることと、自分の意見や疑問とを区別するよう心がける必要があります。
B君 本を読んでいると、別の本が紹介されているのですが、それも読んだ方がいいのでしょうか？ なるべくなら……。



Aさん 下書きや推敲をする時は、図書館を使わなくてもいいですね。

井上 そうですね。下書きを書く時には、本・ノート・コピー・メモなど、いろいろな資料をまわりにおかないといけません。家から全部持つてくるのは大変かもしれないですね。ただ、私は自分の机が散らかっていることが多いので、図書館で資料を広げて原稿を書きますね。

Aさん (小声)ではた迷惑ちゃう？

レポート完成！

B君 おっす！ 見て、見て、西洋史概論のレポートが書けたで。自分で言うのもなんやけど、チョー力作。図書館さまさまです。

Aさん 自分が満足できたならええやんか、成績はどうなるか知らんけど。あれ、このまま出すの？

B君 なんかもすいことでも？

Aさん 先生が言うには、見てくれも大事ですって。表紙を付けて、目次も入れて、最後に参考文献リスト！ 図版なんかも入れると印象が良くなるかも。だいいち、ホチキスで止めとかなと、このままじゃバラバラになっちゃうよ。

B君 なるほど。レポートはテーマ決定から仕上げまで手を抜いたらあかんな。そうや、図書館4階の視聴覚資料室に『レポート・論文を書く！』誰にでも書ける10のステップ』というDVDがあるねんで。レポート出してから一緒に見ようか。

Aさん 今さらと思うけど、秋学期はたくさんレポート書かなあかんから、付き合っわ。



井上 浩一 歴史学部歴史学科 特任教授

「大学はゼミと図書館」、これが私の持論です。昨年刊行した『私もできる西洋史研究——仮想(バーチャル)大学に学ぶ』(和泉書院)でも、図書館を利用したレポート作成について書きました。この本には付録のHPもあって、文献調査法や読書ノートの作り方などを詳しく説明しています。是非参考にしてください。URLは <http://www.izumipb.co.jp/izumi/virtual-u.html> です。

進化する図書館ウェブサービス

図書館専門員 飯野 勝則

はじめに

図書館に所蔵されている図書や雑誌に学術上の価値があることは言うまでもありません。特に、大学図書館においては、このような価値を持つ図書資料を収集し、提供することが、図書館の存在価値に直接結びついています。その一方で、インターネットの出現によるメディアの多様化は、図書館に新たな課題を突きつけることとなりました。言うなれば、モノとして触れることができる実体のあるメディアのほかに、ディスプレイ上でしか見ることのできない実体のないメディア、すなわち電子コンテンツとしての学術情報を図書館はどう収集し、提供すべきなのか、という問題の解決を迫られているのです。

実のところ、紙であるかと電子であるかと、これらはいずれも情報を記載するメディアであるという意味では等価値であり、情報そのものの価値には影響を与えることはありません。このような、同一の情報に紙や電子といった異なったメディアとして姿を現す「トランスメディア」という状況はすでに一般化しています。さらには、もはや紙では出版されず、「ポーンデジタル」な電子コンテンツとしてウェブサービス上でのみ扱うことができる学術情報も増加の一途をたどっています。

このようにして、情報の姿や形は変化する一方ですが、「信頼できる情報を、それを必要とする利用者が

に提供する」という図書館の役割が変わることはありません。欧米の図書館では、電子コンテンツの購入額が、紙の図書購入額を凌駕するという状況が一般的になりつつあり、図書館の姿は顕著に変化しています。その価値は揺らいでいません。実際、その背景には、図書館が情報を扱う機関として、ウェブサービスに親しんできた歴史があります。近年のトランスメディアな状況は、その延長線上に存在する変革であって、図書館にとっては決して対応が困難な状況の変化ではないのです。

では図書館はウェブサービスにどう関わり、どう利用してきたのでしょうか。

図書館とOPAC

図書館におけるウェブサービスの利用は、OPAC (Online Public Access Catalog) と呼ばれるオンライン蔵書目録を中心に発展してきました。今でこそ、「蔵書検索」とか「OPACで検索」というような言い方が一般的ですが、当初は、必ずしもOPACと検索という概念は必ずしも結びついていたとはいえません。OPACは、その英語名称が意味するとおり、利用者が



図書館目録に対して、「オンラインアクセス」できることを目的として設計されたサービスであり、それ以上でもそれ以下でもなかったのです。また初期においては、OPACはネットワークに接続されていない端末で個別に運用されるのが一般的であり、ウェブサービスとはかけ離れた存在でした。

やがてインターネットの普及とともに、OPACはその性能を進化させ、検索、すなわちサーチを主目的とするウェブサービスとして、認識されるようになりました。実のところ、OPACの本質は目録であり、蔵書という学術情報のありかを示すシステムにすぎません。しかし図書館における学術情報の提供が、ほぼ蔵書に限られた時代が長く続いたがゆえに、「図書館のウェブサービス」といえばOPACという状況も長く続いたといえます。

図書館とウェブサービス

1990年代の後半から、欧米の大学図書館を中心に、電子ジャーナルやインターネット上で提供される商用データベースの普及が進むようになりました。当初は電子ジャーナルの数も多くはなく、またウェブ上で提供されるデータベースの数が限られて

いたこともあり、図書館は個々にウェブサイトを構築し、これらのコンテンツへのリンクを張ることで、図書館ポータルサイトの萌芽とも考えられるサイトを立ち上げるようになります。かくして図書館は外部のウェブサービスを利用するとともに、自らのウェブサービスの充実を図るようになったわけでした。

その後、電子ジャーナルは数を数十万タイトルへと急速に増やし、また全世界における商用データベースの数も完全に把握するのは困難ともいえるほど、多岐にわたるようになりました。図書館はこれらの「情報爆発」ともいえるような状況に対応するため、リンクリゾルバ (Link Resolver) や横断検索 (Federated Search) というようなシステムを導入し、検索能力を向上させるべく、ウェブサービスの改良に努めるようになります。

実際、佛教大学図書館のポータルサイトも、こういった流れの中で形成されてきたものです。とはいえ、その内容はさらに進化を続けています。もはやかつてのようにOPACを中心に構築された単純な「お知らせ」サイトではありません。また電子ジャーナルや商用データベースへの単なるリンク集でもありません。実のところそこには図書館が提供するあらゆる形態のコンテンツを効率的に提供できるような、最新の仕組みが隠されているのです。

ディスカバリサービス

近年、大学図書館においてはディスカバリサービス (Discovery Service)、またはウェブスケールディスカバリ (Web-scale Discovery) と呼ばれる、図書館の



〈参照画面〉
1



蔵書や商用データベースのコンテンツを統合的に検索するウェブサービスが、話題となっています。日本ではOPACほどその名前は普及しているとは言えませんが、欧米の図書館ではすでに一般化した存在になっています。佛教大学図書館では、日本で初めての試みとしてこのウェブサービスの日本語化に取り組み、2011年より、「お気軽検索」の名前で、図書館ポータルサイト上でサービスを提供しています。

では実際にこのウェブサービスには、どのような特徴があるのでしょうか。例えば「お気軽検索」を用いて「紫式部」と検索してみよう（参照画面1）。

検索結果の画面には本学に所蔵されている紙の圖書のデータが写真付きで表示されています。クリックすると本学のOPACへとたどり着くことができます。そのほか、Onlineという黄色いアイコンがついた「日本大百科全書」というデータをクリックすれば、インターネット上のデータベースである「ジャパ

〈参照画面〉
3



このように図書館が提供するあらゆる形態のコンテンツをひとつの検索窓から効率的・合理的に検索表示することができるとい機能は、かつてないものであり、ディスカバリサービスの大きな特徴であるといえるでしょう。

なお、このような絞り込みの技法を「ファセット」と呼びますが、図書館におけるデータ分析の標準的な手法として、近年各国のシステムで普及が進んでいます。

ディスカバリサービスの持つ意味

ディスカバリサービスの登場は、図書館にとって

「ナレッジ」の該当項目を読むこともできます。つまりここでは、紙のデータと電子の百科事典のデータが共存しているということになります。

さらに画面左側のチェックボックスからは、チェックボックスを使ったデータの絞り込みが簡単にできるようになっています。「絞り込み」チェックボックスで「本文あり」にチェックを入れれば、電子コンテンツとして全文が読めるデータに絞り込んで表示させることもできます（参照画面2）。

〈参照画面〉
2



同様にフォーマットで「雑誌論文」を選べば、図書や百科事典を除いた論文データに絞り込んだ表示となります（参照画面3）。

新たなパラダイムであるといえます。とはいえ、検索対象として紙であろうと、電子であろうと、区別なく統合的に検索できるといのは大きな進歩ではありますが、それだけでパラダイムシフトと位置づけるには、少々もの足りないと感じる方もいるかもしれません。しかし本質は、ディスカバリサービスという名前に目を向けた際に、明らかとなります。すなわち「発見」におかれているという点が明確になるからです。今日に至るまで、図書館のシステムは、情報を得る（画面に表示する）ための過程である「検索」を中心に、開発がなされてきました。しかしディスカバリサービスは、利用者が検索結果を自ら組み合わせることで新たな発見（発見）に導けるようになることを目的としています。検索結果をもつて、利用者のアクティブラーニングを助けるサービスとなる。この点がパラダイムシフトに値する図書館サービスとしての概念的な転換点であると言えるでしょう。

結びにかえて

近年の世界の図書館を巡るウェブサービスの進化は、目覚ましいものでした。とはいえ、情報技術の発展に終わりはありません。新たな知識や発想の出発点として、より有用な存在となるように、図書館のウェブサービスは今までも、そしてこれからも進化を続けていくことでしょう。歴史を持ちながらも、常に新しい存在であり続けること。それが図書館に課せられた使命なのですから。

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2010～2013年度前半期

このたび図書館報『常照』第60号の発行に合わせて、
 休刊中であった2010年度から2012年度までの3年間と、
 2013年度前半期の事業活動について報告します。

2010年度

4月	「図書館の運営と管理の方針」を作成し図書館委員会に報告。
6月	図書館1階に新着コーナー、特集コーナーを開設。
7月	図書館1階、3階に書架を増設し、文庫・新書コーナー配架資料の充実を図る。
10月	佛教大学教育後援会の援助金により、講談社学術文庫、ちくま学芸文庫などを整備。
2月	「佛教大学附属図書館の整備計画案について」(図書館資料・書架増設・施設設備等に関する5カ年計画)を作成し図書館委員会に報告。
3月	図書館報『常照』を休刊し、図書館広報誌『Lynzo』vol.1を発行(以降、2013年1月のvol.10まで継続発行)。
2月	「佛教大学附属図書館収書基準」改定。
3月	図書館4階に視聴覚資料室を設置。
2月	二条キャンパス7階に二条キャンパス図書室を開室。
6月	特集コーナーテーマ(2010年6月～2011年3月)
7月	京洛学游ー京に学び、都に遊ぶー
8月	世界の古典を読む
9月	幕末・維新を考えるー動乱の時代を駆け抜けた男たちがいた!!ー
10月	遥かなる旅へー旅行記と航海の記録ー
11月	能・狂言の世界
12月	世界文学全集を読む
1月	江戸随筆を愉しむ
2月	戦国時代を考える
3月	乱歩・正史・清張と世界のミステリフェア
3月	日本思想・日本文化研究の名著選

2011年度

5月	図書館3階、4階マルチメディア端末コーナーを開設。
8月	図書館1階に書架ならびに学習・閲覧スペースを増設し整備。2階にマルチメディア学習室開設、同じく2階に書架ならびに学習・閲覧スペースを増設し整備。
9月	佛教大学教育後援会の援助金により、日本文学、中国文学に関する研究書を整備。
11月	「佛教大学附属図書館の複本に関する課題について」(図書館整備計画)を作成し図書館委員会に報告。
3月	『京都本能寺町前川五郎左衛門家文書目録』第4巻を発行。
4月	特集コーナーテーマ(2011年4月～2012年3月)
5月	こんなに楽しい絵本の世界
6月	茶道の古典を味わう
7月	軍記物語を楽しむ
8月	一度は読みたい歴史・時代小説の名作
9月	フィクション?いいえノンフィクション!!
10月	東洋学の巨人たち
11月	明治の文豪たち
12月	西洋の歴史と文化を探る
1月	日本仏教の祖師たち
2月	仏教美術に魅せられる
3月	日本民俗学の大家たち
3月	近代仏教を問い直す



2階 学習・閲覧スペース



4階 マルチメディア端末コーナー



4階 視聴覚資料室



『Lynzo』vol.1表紙



1階 文庫・新書コーナー



1階 新着コーナー、特集コーナー

2013 年度前半期

6月	図書館3階、4階に書架増設。
8月	図書館3階に講談社文芸文庫コーナーを、同じく4階に軽読書コーナー Lynzo 倶楽部を設置。
佛教大学教育後援会の援助金により、講談社文芸文庫を整備。	
特集コーナー・テーマ(2013年4月～9月)	
4月	古代ギリシアの歴史と文化
5月	日本中世の文学
6月	李白と杜甫——中国唐代の詩人たち——
7月	ヘミングウェイ、フィッツジェラルドとその時代——失われた世代の作家たち——
8月	幻想と怪奇な世界
9月	史伝文学の醍醐味

※特集コーナーの展示貸出図書については、佛教大学ホームページの図書館のイベント欄からアクセスして一覧を確認することができます。



4階 軽読書コーナー Lynzo 倶楽部



3階 講談社文芸文庫コーナー

2012 年度

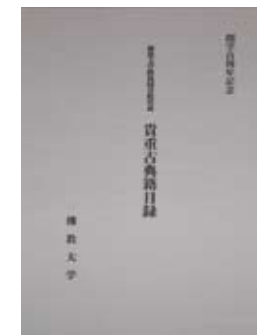
6月	「図書館の開館時間と休館日について」(国立大学図書館協会近畿地区協会、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会阪神地区協議会ならびに京都地区協議会、私立短期大学図書館協議会近畿地区の加盟館へのアンケート実施結果)を作成し、図書館委員会に報告。
10月	開学100周年記念事業として『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』を発行。
1月	「図書館における消耗図書の取扱いについて」(図書館整備計画)を作成し、図書館委員会に報告。
3月	図書館地下1階A層床補強工事ならびに書架増設、同B層準貴重書庫改修工事による整備。
図書館4階に語学教材コーナーを設置。	
特集コーナー・テーマ(2012年4月～2013年3月)	
4月	京都をめぐる歴史と文学
5月	平家一門の栄枯盛衰
6月	古事記と日本書紀
7月	日本の伝説
8月	キリシタン時代を考える
9月	西鶴と芭蕉
10月	方丈記とその時代
11月	歌舞伎の世界
12月	忠臣蔵——史実と小説と——
1月	紀行文学を読む
2月	子規と漱石
3月	日本の歴史と文化を考える名著選



4階 語学教材コーナー



2階 叢書ユニベルシタスコーナー



佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録

佛教専門學校
附屬圖書館
成徳常照館之記



「佛教専門學校附屬圖書館成徳常照館之記」木額

本圖書館ハ京都市東山區下河原町貳拾二番地上村米子上村里子上村喜代子三氏ガ故上村常治郎氏ノ遺志ニ因リテ昭和九年一月二十五日淨土宗教教育資團ニ寄附セラレタル淨財ヲ以テ建設セルモノトス抑モ上村家ハ世々淨土宗ヲ信ズルコト篤ク殊ニ先々師大本山清淨華院第七十世獅子谷佛定大僧正及ヒ先師大本山百萬遍知恩寺第六十八世土川善激大僧正ノ勸化ヲ蒙ルコト頗ル大ナルモノアリ故常治郎氏ハ資性温厚寡黙謹嚴ニシテ深ク先師ニ歸依シ生前膠漆モ啻ナラズ而シテ先師ノ一身ヲ宗門育英ノ業ニ献ゲ宗学ノ興隆ヲ以ツテ畢生ノ念願トセラレシガ氏亦夙ニ布教傳道ノ世道人心に裨益スルトコロ大ナルヲ痛感シ相俱ニ財團法人成徳會ノ設立ヲ企圖セラレシガ機縁未ダ熟セザルニ昭和三年八月二日氏先ヅ他界セラレ次イデ昭和五年三月三日先師ノ示寂ニ遭ヘリ爾來五星霜余不肖ノ身ヲ以ツテ先師ノ遺命ヲ承ケテ上村家ニ出入ス偶々本春二月佛教専門學校ハ多年ノ宿願タリシ移轉改築ノ業ヲ達成シテ洛東鹿溪ノ幽邃ヲ後ニシテ洛北衆只ノ明媚ニ移リ白壁ノ雄姿聳立スルヲ見ルニ至レリ然ルニ未ダ圖書館建築ノ議成ラズ宗門最高ノ學府トシテ實ニ畫龍點晴ヲ缺クノ感アリ余亦建築委員ノ末端ニ連リテ日夜コレヲ遺憾トセリ

未亡人米子遺子里子遺孫喜代子三氏ハ當夏故常治郎氏ノ第七回忌正當ニ丁リテ其ノ追福ノ爲メニ故人ノ遺志ヲ體スル最上ノ聖業トシテ圖書館建設資金ノ喜捨ヲ快諾セラレタリ斯クシテ本圖書館ノ業ハ忽ニシテ其緒ニ就キ闔宗コレヲ欣幸トシ學學ノ篤志ニ感激セリ乃チ二月十五日淨土宗管長ヨリ佛教専門學校長小林瑞淨ヲ建築委員長ニ小林圓達石井龍喜江藤激英ヲ建築委員ニ任命サレ直ニ其ノ實行ニ着手シ四月六日地鎮式ヲ舉行ス超テ六月二十七日文部省ノ認可到達シ七月一日工事ヲ開始ス而シテ十一月十五日全ク竣工ヲ告ゲタリ本圖書館書庫ハ鐵筋混凝土三階建面積六十七坪餘閲覧室ハ木造二階建面積五十參坪餘ニシテ建築ノ設計監督ハ第三高等學校教授工學士八木清之助氏工事請負ハ大阪市松村組社長松村雄吉氏現場監督ハ工學士宮川久三氏ナルガ京都帝國大學司書藤堂祐範氏亦タ諸般ニ亘リテ盡瘁セラレシトコロ渺カラズ

和南

昭和九年十一月十五日

江藤激英謹誌

佛教大学附属図書館の沿革と名前の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門學校があつた京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあつては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く

帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建で、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階、

地下2階で100万冊を収蔵することができます。

佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属圖書館成徳常照館之記」（木額・翻字の全文は前頁に掲載）にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門學校第7代校長江藤激英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。転輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したことに同じ功德を得られるといわれています。



1934（昭和9）年11月23日の図書館落成式

後記

佛教大学附属図書館報は、開学60周年記念事業として図書館が新築された1972（昭和47）年5月に創刊され、第2号からタイトルに『常照』の名称が冠されるようになりました。2010（平成22）年3月に第59号まで発行しましたが、リニューアルを進めるために一旦休刊にしていました。このたび開学101年目を迎えた本年に、図書館報をリニューアルし、第60号を発行できたことは、本学の歴史への新たな一歩を刻むことにもつながっていくものと思います。

佛教大学附属図書館報『常照』第60号

発行日 平成25年10月23日
発行者 佛教大学附属図書館長 谷口浩司
発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
佛教大学附属図書館
制 作 株式会社栄美通信